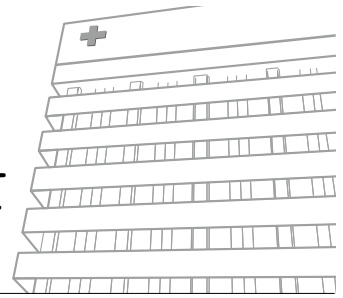


大 学 医 局 紹 介

— 産業医科大学病院血液内科 —

地域に浸透する「血液・腫瘍」の診療をめざして

産業医科大学病院血液内科 診療教授 塚田 順一



【歴史】

産業医科大学病院は、昭和54年に開院し30数余年が経ち、産業医の養成に加え、特定機能病院として地域医療に貢献しています。多くの診療科の中で、当科は平成17年にがん化学療法の部署として誕生し、平成19年から血液部門が移管され、「化学療法センター・血液科」となりました。さらに、平成27年1月からは「血液内科」に名称変更します。

このように、当科の歴史は他学の血液内科医局に比べ浅く、まだ赤ん坊かもしれません。しかし、平成24年から産業医科大学若松病院の緩和ケア・血液腫瘍科(平成26年から現在の名称に変更)において葛城武文助教が診療開始し、平成26年4月から岩重淳司助教が当院緩和ケア部門に異動し、緩和ケアセンターにおいて診療を開始するに至りました。

【施設の特徴】

当科の歴史と同じく、現在の病棟は約2年半前にできたばかりで、スタッフの理解もあり、化学療法

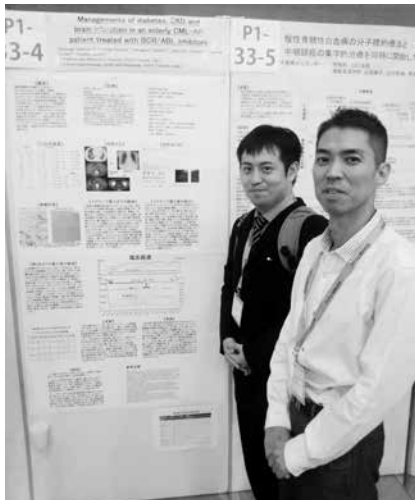
に良い環境です。一方、血液の診療は感染症との闘いでもあり、無菌管理をしばしば必要とします。同病棟には新しく完全無菌室6部屋を有し、患者増に伴い新たに3部屋増設する予定となっています。また、産業医科大学若松病院にも無菌室2部屋が設置され、葛城武文助教が管理をしています。

従来、抗がん薬は入院のイメージでありましたが、最近では外来投与も当然として行われています。当院の外来化学療法センターは25ベッドを有し、全て診療科における外来抗がん薬の注射が同室に集約されています。

もう一つの特徴は、歯科口腔外科など全ての診療科が揃った大学病院は大きな利点です。臓器合併症が発生した場合、電子カルテを介して患者情報を即座にこれら診療科間で共有でき、診療の質は格段に向上したと言えます。

【診療の特徴】

新規の薬や検査：急性白血病や悪性リンパ腫は薬物



療法だけで治療が期待できる数少ない悪性腫瘍として知られており、治療というゴールが血液内科医のモチベーションとなっています。急性白血病を例にしますと、以前から標準

治療は強力多剤併用療法です。これらの有害事象は患者にきつく、治療にあたる血液内科医をも苦しめてきました。血液以外の医師には血液診療の困難さと映っていたと思われます。しかし、近年、抗体薬(標的抗原:CD20・CCR4・CD30・CD33)、チロシン酸化酵素阻害薬(イマチニブ・ニロチニブ・ダサチニブ・ボスチニブ)、JAK阻害薬、メチル化阻害薬、プロテオゾーム阻害薬、IMiD(サリドマイド・レナリドマイド)が登場しています。支持療法では、頻回輸血に対する経口除鉄剤やpegfilgrastimは発熱性好中球減少の予防を容易にします。抗菌薬、特に抗真菌薬はめざましく、難治性真菌症も予後が格段に向上しています。これらを従来の治療に組み入れ、有害事象を増加させず上乘せ効果を得たり、イマチニブのように従来の治療を凌駕した例もあります。検査では、「標的遺伝子の点変異解析」、「PCR法での残存腫瘍検出」、「FISH法での融合遺伝子解析」、「高感度フローサイトでの微小病変検出」、「サザンブロッティング法を用いたクロナリティー検出」、画像では「PET」なども利用でき、適切な薬の選択や追加だけではなく、逆に治療の早期終了も可能になりつつあります。当科もこれらを取り入れた診療体制を確立しています。

造血幹細胞移植:重症で薬物療法が奏功しない場合は、現在でも造血幹細胞移植が第一選択です。従来から行われてきた自家末梢血幹細胞移植および血縁間の同種造血幹細胞移植の安全性は確実に向上しました。しかし、ドナーと患者間のHLAが一致する確率は兄弟姉妹でも25%です。このため、血縁ドナーがいない場合、骨髄バンクや臍帯血バンクを介する移植が実施されます。ここにおいて、本年、当科は

骨髄バンクの非血縁間同種末梢血幹細胞移植の認定を得、バンクドナーの末梢血幹細胞を利用することも可能となりました。さらには、抗T細胞免疫グロブリン製剤の導入にて、一部のHLAが合わないドナーからの移植も可能となっています。

一方、移植前処置として行われる抗がん薬大量療法に耐えられない患者に対しては、近年、前処置を軽減した骨髄非破壊移植が開発され、当科でもこの方法を実践し、その有効性を確認しています。このように、ドナーソースの拡大や移植適応の緩和は福音であり、当科も我が国の移植医療に寄与できればと願っています。

【内科として血液診療】

一般的に血算は採血で最も多い検査で、血算異常はcommon diseaseの一つと言えます。このため、血液診療はその専門性だけでなく、医学全般の知識や技量が問われます。移植や化学療法では、感染症だけでなく、内臓・神経などの全身臓器の異常に対する鑑別診断や治療、栄養・電解質・循環の管理などが必要となります。すなわち、内科医として全身管理が出来なければ、このような治療は行なえません。

血液疾患はその性質上、患者や患者家族との関係構築が重要であり、良い患者・医師間のコミュニケーション技術も要します。しっかりしたICの上で治療が開始されるべきです。これらは、若い医師にとって良い経験で、当科としても、彼らに血液の診療を通じて、内科的な全身管理を学んでほしいと期待しています。当科指導医もこれらは重要性を理解し、血液学だけでなく広く医学を学んでほしいと願っています。

【おわりに】

当科は特定機能病院の血液・腫瘍の診療科として、より良質の医療をより多くの患者に提供していきます。このためには、若い医師の育成にも力を注ぎ、良医を輩出していきます。まだまだ当科の歴史は浅く力不足もあるかもしれませんが、地域の先生方の協力も仰ぎ、活躍していきたいと願っています。

患者紹介に関しては、初診外来を毎週月・木曜日に行っています。また、当科にご興味ある先生がおられましたら、ご連絡をください。当院HPにも当科の情報を公開しており、ご参照頂ければ幸いです。今後とも、よろしくお願い申し上げます。